萬國新話　卷末

ル7
3100
5止

早稲田大學
圖書館
寄托者 内田文庫
寄托書第 四二
號
第 5
號
第 5 止
冊

門ル名ム
號 2855
巻 5-6

門ル 7
號 3100
巻 5

萬國新話卷之四 亜細亞海嶌之部

東都 森嶌中良 編輯

大正十年九月廿日寄
内田孫子氏贈

錫蘭

○象人語を解す

錫蘭嶌ハ象多し。他の象と異みなく。能く人の語を解し。人物を負ひて。棄地小至るまで命令すれば。かたくなに爽へぐして。所を送るとも。遇へば。ちかう地に蹲て伏すなり。

○桂枝　同上

此嶌の山林。おのおの肉桂、紙産を。土人刀紙にて、くさを樹に畫を入、外皮を剥去り。第二皮をとりて日に晒す。其生ずる時は黄白色なり。乾くに迫ひて両端を内に巻縮せの色変して黄赭色をなす。是茎用の桂枝なり。其樹三年にして歴ぶ。皮紙生ずるの枝のみ。

○涅釈迦　同上

明史外夷傳に云。錫蘭國の海辺に山上に石

あり。石上に一の足跡あり長三尺ばかり。是紅毛雑話中天竺山の條に誌せる佛足石に当るなり。如老いたる。佛翠藍嶼同書中に瓜哇東南海中三四の山あり總名紙翠藍嶼とあり中良業に錫蘭翠藍華音同なり来たる。別所にあるなり。此紙踐かるゝ毎に高存なり。

淺水あり。四時ともに乾ず。人皆目を拭ひ面を洗ひ。仏寺清浄なり。山下に仏寺あり。釋迦如来の眞身牀上に側臥をかゝ小仏牙。おのゝ舎利有。五体に佛涅槃の處なりと。其寝座は沉香にて是を作り諸の寶石紙にて莊厳せり。中良業に竹枝詞

の注に永楽中鄭和に命じて金銀宝幡を布施となし給ふる勅書あり

○人の血を浴せ　蘇門荅剌

嶋夷志に曰。蘇門荅剌の酋長。毎年十餘人の人を殺して。その血を浴せられを浴せ。別四時疾疹を生ぜざることなし。中民案ずるに古城王の人肉酒を飲ませるものか

○犀象を飼ふ

「ヨハンブラ」が萬國畫説に曰。此王は象きくめて大めしく他人より別。戦闘に用ひ珠玉象に用ひ又犀牛を性くるぶる象を恐れむ。かなるものと雖ども能象闘ふ。

其時小闘ふんとする時は。石上にあく角を磨ぶ。象は頭を突破て殺す。犀は大さ象より垂るものなり。その形状主治は。伯氏著す所の和蘭薬選に見えたり。

○鷹鳥王　呂宋

呂宋は地小鷹を産す。天正の初泉州堺に商人納屋助左衛門なる者小琉球より此地小別て文録三年彼地の産物を携帰る。鷹鳥王あり花咏をもてかりに衆鷹を従へ。或は禽獸を獲れば。鷹王まづ先を睛を抜喰ふを俟て。然して後。群鷹其の肉を喰ふ

となり　明人の説

○地球伊西把尼亞小集ル　同上

往昔伊西把尼亞國は人。伊西把尼亞ハ歐羅巴中の一大國なり華人の説に拂郎機人呂宋を奪ひしと云ふ呂宋より来る互市を。或時黄金を以てこぐく球王に奉ずるに曰。球ハ牛の皮ほ屋を蓋ふばかり地を与ハ人と。王申さを。伊西巴尼亞人ほかハち牛ほ皮を数多續ぎ。数間の土地を皮ふく囲ひ。是ハ称ふばけの地球をひけるなり。呂宋王ほ為ん。といへども信ぜず

夷ハ矢ハんるすも黙止かざりしが其後ハ地を舉ハ伊西把尼亞やがて地ハ城球築き室球宮み銃を列れ刀剣を置く要害を堅固ハも。其後遂ハ呂宋を圍て王球殺し。此図を畫く。伊西把尼亞ほ有とぞなりハる。今を多年伊西把尼亞の呂宋を。曾呂利が太閤秀吉ハ紙袋一盃米球球ハんと乞ふと同日の談多。

○男色球禁ぜ　同上

東西洋考ハ曰。呂宋國狡童ほ禁を嚴うて。

此地より来る華人犯すべからざるの法を設け天下
遂に罪人なりとして新紙積て焚殺
すべしとなり。中良案るに男色を禁ずるの法紅毛とおなじ
商長を宗教西洋の法代用あるなり　歐羅巴中北伊西把尼亜より

○丁子　英　沙谷栄　馬路古

家兄の譯説小曰馬路古の諸嶌八赤道の
下にあり。其北多る小嶋より多く丁子
出産す「テルナーテ」「チドル」「モチル」「マ
シアン」「バシアン」の五嶌殊に多しとなす。
丁子樹月桂に似たり。葉やゝ長く狹く柳の

葉の似たり。花もまた花に似て白く。後緑に変ず
蕚ゝ墮ず。色赤く堅まり遂に変じて
実となる。其形状行のごとし。故に名て丁子
といふ。紅毛にて「ナーゲル」といふ「ナーゲル」は釘の
変名なり丁子は漢人の義譯なり　花は緑
色なる叶。芳諸花の乃に所にわたる。其
實は枝の頂に攢簇て。此地法多くひて
畜獸なし。只羊と鶏とあり。故に
給糧にすべきものなし。土人樹皮紙を製して粉
をなし。餅に造りて食とす。其樹を「サア
ゴウボール」といふ。彼餅に製しうるものは。

所謂沙谷米なり。

○食失鶏　番達

番達ハ高サ小鳥なり。此鳥小異鳥ニ類ス。甚多シ「エメウ」ト云フ。大サ鵠の如ク。古ナリ翼ナシ。羽毛黑ク坦ナリ上ニ冠有リ。其質鼈殼の如シ。凡ハ甚タ疾ク物ヲ觸レテ後ニ自ラ跳ル。馬の跳ルが如シ。熾炭磁器ヲ呑ム。是「エメウ」なるべし。

いまだ食失鶏なり。俗人やとりそれで食失鶏を駝鳥とうちがへてえらるるのあり

此鳥

安永年間紅毛人（加比丹ハ「カピタン」ニ「ヒ」ハ「ビ」の内ニ見えぬ方まこと）ヲ携ヘ来ル公ヘ進献ス。後ニ死ス。

飼セラレタルガ。義経ヲ死ス。

なり。客歳蹄毒館ニ第品會の時。

医官田村氏。此ヲ見テ死ス。公ヲ

慰ムルニ。其ノ屍ヘ出ス。

○唐泊浦孫七勃泥ヘ漂着の話

筑前ノ國志摩郡唐泊浦の伊勢丸ト云フ

船。水主船頭トモ二十人。宝暦十二年十月。

奥州常陸の堺なる。塙屋ノ岬の海上ニテ

難風よあひ。天竺に屬嶋。渤泥へ漂流し。同國中。「カラガニ」「ソウロク」文郎馬神などいへる地を遍歴する内。国祖の者ハ残らず死亡し。只一人活のこりて。明和七年六月十六日。渤泥に近江。瓜哇國の都城。ヒヤヒヤより発船せし紅毛船にて。日本へ送られ帰国せし孫七なるもの。渤泥ハ五ケ間に物語を審ふ事紀しるす。七天竺活と標記せる書一巻あり。元書中より抜萃せる事

ものを以ふ紀ものを。全編ハ海外異聞ふ収録を。

○異菓　渤泥

孫七なるもの渤泥へ漂着せし時。陸より上りて山林に入れば。栗のごとき菓。枝も撓ふ生りなりを。行ものハ飢渇あるとき。多くハ食するふ。其味ひ甘酸し。まづく古て頻に肚腹胃完痛あるとも酒ハ醉しるるハ。目眩して卒倒することもなれど。死に至るハ稀のてもなり。詮久しく

して元の復し精も附。然れども帰途の人は弱き人なり。後日了土人より弱き人ども。此実を搗碎き大河の測へ沉め。水底の魚ども喰喎浮ぶ時。網を入れ是を取れば。大なる毒ある菓子と結ばしとなりん。

○日本人を見世物みせ　同上

渤泥國中「カラガニ」といふる城下ふ。吟ひ居る内。其の湊に船去つひ漂人小乗船をへしといふ。皆く赤毛なる人

皆帰ると。公姥しく宗稙迄バ。船は八三ッの帆を引揚。同国中「ソウロク」の城下了若岸し。同船の者共引分て居く所へ賣渡し。幸五郎といふる者主と孫七なるバ。「ソウロク」の地へ賣渡しぬ。二人ハいろ〳〵ある雙貝如ものるとい〳〵欝悒ひ居るふ。夷ども来て。延る月代を剃せ。日本風小髪に結せ羅紗の羽織を着せ。戯墨を擦へる所へ帯行ぬ。二人ハ一度ハ合点行ねど。夷どものそるまゝもふ如

居るまゝハ。ゆく小紙太鼓を持せ。銅鑼太鼓
噴吶を持る烏鬼どもゝ後ふ列をし。松
子可笑しき体。いとさ毎に紙
こゝを物ふる事よと今得たるうら。見
物の男女山のごとく集ひ。疾くしめとし
いふるもあや。口くよ喊起りて。こゝ所
の夷。行たくともも日本ふ紙唱ひて踊迷
といふ。否といくぐ命紙や失りれんぐら
んとゝ情ぐ為役なく。池の泥亀
そぷんぷへ五時ぐげ前泥亀の子と。是ハ西国の小亀なり

取汐拍子ふ躍里了迷バ。今までの看人と新
入れ看庶人と入替るさ毎。何ほもかりぬ
形勢ぐ。丈よりふ此女人紙駕籠ふ乗せ。
所々方々紙見世ものふ連ぶ。そ号ハ
食物よ紙を附。火酒紙欲せぐ。て簾
畧ハせぐ。

○火酒　同上

此地の火酒ハ。飯を炊く糯ふ入紫糖ゝ水
ふ浸し煮ぐ。泡立て涌上るなり。丈毎
泡消く後。釜ふ入醪をとて。麦々をとり

たり

○イリンカワトの人物　同上

男子ハ身の長六尺ばかり。耳もく爲。耳朶に真鍮の環を入れ。髮ハ赤く結れ。眼の色淡白し。皆丸裸にして。褌ばかり上ハいさゝか物を纏へり。女ハ耳環をつなぎて。瑤珞の如くにかけ。牙ハ羅紗衣を穿て臂より先と絢と紙を巻り。螺髮を堆髮ゆ。生花をこれに挿く。并ととゝのへり。

渤泥國の人ハ行ふも大抵同じ風俗のおもむきなり

○死人の首を斬　同上

「イリンカワト」の地にて。親死ときれば首を切く殘し。亦。外人ハ首を切て死骸ハ接。厚く是を葬る。男ハ女の首。女ハ男の首を葬る。有者ハ多く賣人を買て接とす。貧者ハ接首を備へ。貧困にして賣人を買事能ハざる者ハ死骸の科人を乞て。首を接。又ハ他地へ出て椎埋し。其首を來て葬れハ

借りるなり。

○文郎馬神の風土　同上

文郎馬神ハ渤泥國中ハ都會なり。南糸。福州。山東。山西の華人借地しく舗を設く。彩紙ハ行れも尾蓋なり。市街紙板ハ白紙なり。往来の人ハ紙踏ぐ華紅蛮舶輻湊す。甚繁昌ハ地なり。孫七ハ此町内の綵帛舗へ金銭三十文ハ買ハ遣。此金銭ハ一文を銀十匁同ハ弟ハ紅毛の金銀銭ハ通用ハ紙紙の銅殺しの下男なり。名を日本と呼れけり。主人

ハ華人ハ名ハ紙タイコン皮とゝひ。妻をハキレトンとゝ。伴當手代も華人なり。下男ハ鳥鬼。下女も崑崙奴の娘なり。上下二十人餘のくらしなり。家ハ豪家なり。主人夫婦老母とも結構人なり。家内の元老ハ法を正行義なり。男女席ハ同じくして食せり。飯ハ下男ハ捷せ下飯ハ下女ハ調理せしむ。此玉都て暖気なして孫蔵五六月ハ気候のなく寒ハ四時とも草木ハ花咲満て絶ることなし。みな常衣なして淡

さるかに小蟹蚊多し。蚤と多く蟻と多く。蚤より蚊蟲多たるなり。

○言語　同上

文部馬神ハ。是ハ何ぞと問ふる時「コレサミヤアロ」ぞ。するとかくするとの事を「テウサミヤアロ」といふ。数ハ「シヤトウ」一「チカ」二「アシハウ」三。四の重語「トロ」五「アシノヒ」六「トンロ」又「ヤツトウロ」七「ハロウ」又「ダラハシ」八「サンヤアロ」又「サヒイラヒ」九「サツポロ」十本書ハ此外の語ハ紀さず。

○商人　同上

街路を行ふ坊賣。声ハ高く喊るなり。

阿剌吉賣ハ噴呵を吹。貨郎ハ簫ハ吹。

油部ハ鐸を振。醤油賣も

賣肉翁ハ小太鼓ハ敲ハ。行れも擔丈ハ頁しかく賣あるく

○婚娶　同上

孫七ハ主人の才カンベン官ハ。作伐する人有く。結親とのひ。良日ハ揀て盛礼あり

中良素ハ小叶婦ハ此地ハ住居する華人の娘なるべし。ハ男の人は女とも多くなる時ハ男の娶ハ利吉婦を好く妻今なる法書ハ載る

官新郎の方ハ新婦の方へ聘礼の品

を送る。其物件ハ。衣服三襲○行れも羽織あり　ハ八ツを函事ハ四を送る
金ハ金ハく造りたる戒指六ツ　手腕ハ金ハ環二ツ　合笄十二本　紅毛金錢百二十文　履一足　襪
一足　大酒一斗入二瓶　蜜蠟五十斤　掛の大蠟燭二挺　猪
牝一足　牡一足　鶏一番　家鴨一番　右の東西或ハ箱ハ入又ハ
臺ハ載く。下人数多ハ持せ。媒人嬌客を
ゝゝめ附添の人人。都て十八人。新婦の
家へ行く紅燈酒肴へ酒肴へ西隅ハ家ハ帰る
ハ。即刻新人の方ハ送る物あり。衣裳
一名巾着二ツ赤き毛氏ハ作りたる也一ツ○中良案ハ毛氏華人のもてる

物ゝゝ枕六〇長壹尺五寸ゝゝの二ツ是ハ氏の枕なり長二尺ゝゝの二ツ
是ハ氏枕ゝゝ長三尺ゝゝ枕二ツ　是ハ足の枕なり
新婦の方ハ送る。猪。家鴨。鶏。ゝゝも雄雌
ゝめく雌を返し。此三種ハ新婦のやく元ハ八ツ　ゝ家ゝく酒肴
金錢ハ二箇当あ。大蠟燭も一挺ハ雄一挺ハ戻し
ぬ。聟の家ハ新人の来ハ新婦ハ戻し。波戻
ハ乗し巨蠟ハ大ハ雌一半切桶ハ米蒸
上。其の其中一押立ハく門首ハ出ぎ渡り
ゝ待間もなく。波聘礼ハ大蠟燭に。挑
燈二張押双べく先を照す。新人と同年齢
の婦人二人。ゝぶハ衣裳被きて左右ハ立ゝ。

新婦ハ却て新を家し。首飾ハ金の元結。銀の櫛。十二本の釵をさし。耳朶ゑ瑞珞をさけ。手足ハ金の環を入。衣服ハいうも斉整ハ扮天蓋のめき物を差。前後の差添十二人。悉し素足。蠟燭。彼半切一石ハ立て華燭の席へ通れバ。氏族家族をもしあ。町中の若者まで。毎ゑ赤い蠟燭を燈し。肩を挨し。足ハ並〳〵へ集ひ。新人ハ対して千歓万喜を演るなり。已一来よハ。娘の容貌をもんぶあり。其燈し。蠟燭。炬の内ハ席ハ修理。飛堂まで燭ハ一つ〳〵なり。拙者ハ客ハ客堂ハ居ハれ。飽食ひ飽飲大吹大擂。終て亜して帰りし。

〇丁子　英　椰子油の價　同上

此地丁子胡椒を商ふ。紅毛人定手銀ハ入て。丁子百斤ハ〳〵價銀百六十目ハ乃つ。胡椒の直本書ハ脱せり。

椰樹　椰子ハ多し。油を絞て燈油ハ一年ハ價八十銭なり。其中良案ハ椰樹ハ天竺地方ハ八行地も有。其樹きゝて良枝多し。舟なり。

車を造る。永く破壊せず。其家ハ屋を蓋はらし。まき編て帆を用ひ。その実ハ飢を療。其漿ハ渇を止む。又釀して醋と化。砂糖と化し。酒ハ化して上好の失酒となる。中夜茶ハ是カラパア焼酒なりとものかゝ「カラパア」ハ椰子の蕊名なり。此酒もて製し。ふあるゝ。気味すげしさ焼酒と長崎のカラパア焼酒と唱へなり。油ハ焼油ハ用ゆるのみ。金瘡。痔疾ハ用ゆる効あり。其莖堅くして釘と為べく。殼ハ碗ハ器ハ飲食ハ盛器。我邦にハ未多飯ハ用ゆ。皮ハ編て索ハ用ゆ。錨纜ハ用ゆ。一木を種て

一家の用をなす。是ハ往年時陽れ吾人何某ハ家の庭中ハ此実ハ拾ひ蒔しが。是ハ吾邦の門。時元なる地方にて種植で此樹を生じ。三年にして実をなすべし。を果西瓜のごとくなり。竜眼肉の生るごとくなり。味美なり。

○年中行事　同上

除夜ハ容堂の天井ハ。印花布の連縫くるを張。壁ハ同じ。幔を門ハ除夜大燭

篭を張り。戸閉して篭り居るなり。
扨五更三点より。毎家の主人衣服改め
親手挑灯を灯し。新年礼賀ふ沿門をあるく
なり。閑くら門の外より「サラマツタ」といへば
内より「ホリロウ」と答へるまであるく門へハ
入ず。門首へ名帖を貼て行なり。親属ハ窟
を開く内ふ入右の挨拶了て後酒肴を出
して祝ふなり。

マツ「ホリロウ」の語華夷人の礼なり。是も其地ふ住居の華人の礼なり。土人の礼ハいまだ自然に此地の習を云別なるや。お書に云ふ所なり。

あり。製法ハ糯米を粉ふ碾き。砂糖水ふて
渡交ぜ蒸て臼ふて搗。切て丸く作る也。又
押平めて角ふ切も有なり。白餅ハ砂糖の色。黒
餅ハ黒糖ふ水ふて渡る色。年始客の往来。
さんざく日ふかふざしなん。三月礼節往
ハさるる。又月の節白ハ糯米ふて浸
し。笹の葉ふ包む。砂糖水ふて煮るもあ
り。又蒸も有なり。七月の盂蘭盆會。日本
ふ習ふざる越なり。後ふ異る。

○燕窩　同上

此地の山洞。川ふ沿る石窟の内に。「カバヤ」と

いろの窩あり。鳥ハ蘇ふ似たり。其窩色
ふく。ちくくと黒ひの所ある所あり。
中良案ずるに蘇窩ハ紅毛語なり「ホーゲルネスト」といふ食料ふ
を味ひ美なるものなれども毒ありとなり
紅毛人入銀して。一斤ハ銀八十目ふ買ふて
たり。炬を焼して岩窟ふ入ばつぐみして
元獲ものゝ。蕃主ふ制禁ありて猥ふ入るの
を禁ずる。紅毛ふ或年。孫七が主人の傭部へ
遣坊来りて。件の窩を私賣する事。巡
防人来りて是ハ又之処ふ。彼者を捕へ
て厳ふく詮議も。色々角と詰ごられど。

而詮議れがたきハ形物なりけるバ是まで
とこひ切やゞて吏の帯せし刀を抜て。二人が
肚ハ突通し。白刃を捨て逃出せバ。二人の吏ハ
疵を負ふ。一二町が程ハ追ふしが息端て
倒伏ぬ。此事おひく少時ふ数多の役人已が
ハ物を提起く。分隊ふ追ふれ。山ふ紙を
く逃登りしが。蔦蔓ふ足まとひて。逃延ずくや
こひけん。大木の梢へよりのぼり隠れ居ふを。
役人ども目ふく見届。鳥流の流口ハ探へく
出をれいハたまりも敢ず逃れ谷底へ打落

されば近人の者ハ去捨てして引返し。
帯傷人を見れバ。早息ハ絶よけり。毋谷へ
折籠られる王房ハ。ひづふ猛を去置れ
るまでなりれバ。辛き命紙助り。二三日
の後谷ひよ出ひお。何ほとも多く逃繋
走りるとぞ。

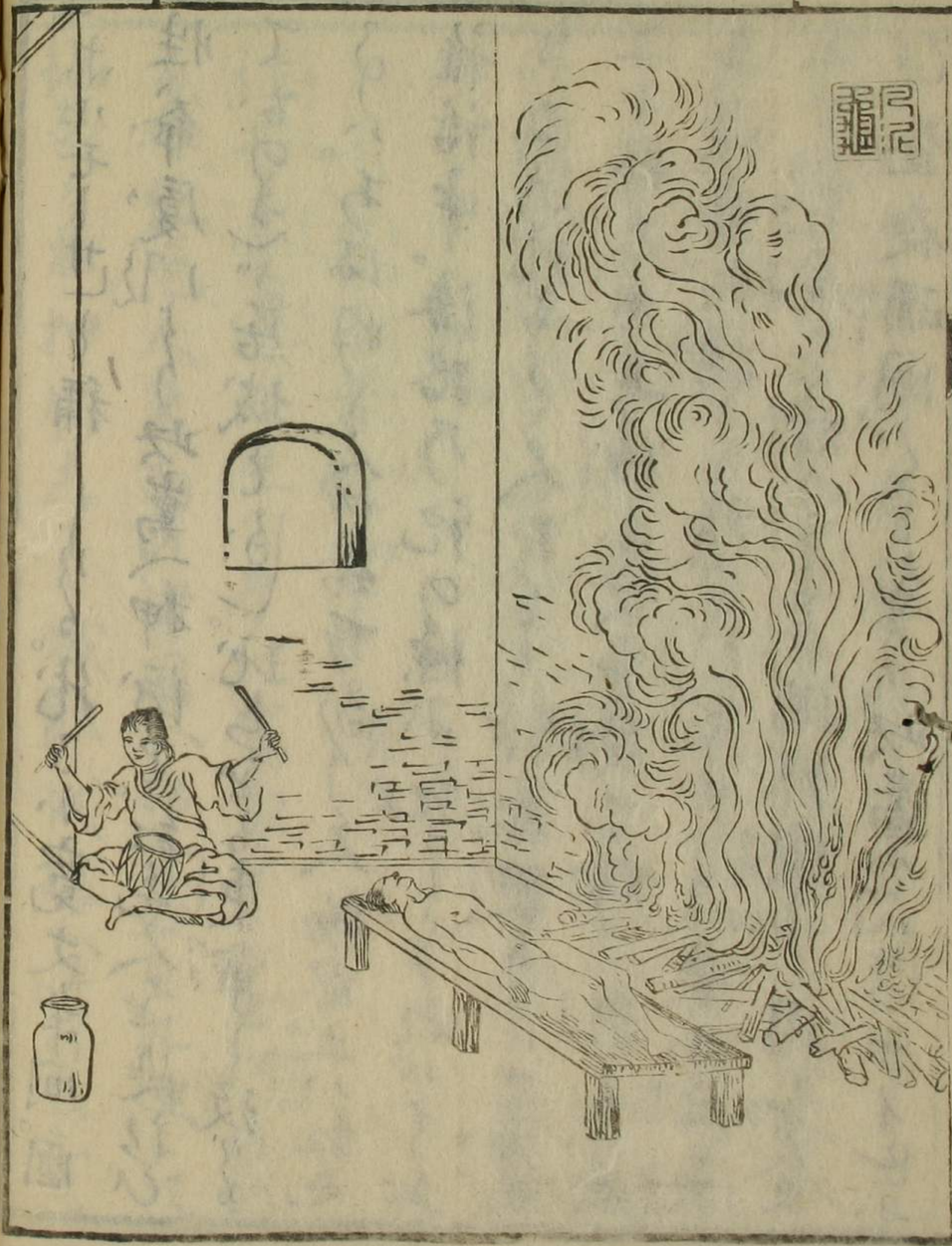
○褒居者歌舞を　臺湾

往昔臺湾は主もなれ嶌多りしを。何の比
ゆゑ。紅毛人東南の諸國へ船を出に便れ
地多り故。押領走く城郭式搆く時の名を

「ホルモーサ」と稱しる。此るハ寛文年間。國
性爺厦門より此嶌へ押渡り。紅毛人を追拂ひ
て。おのれが居城とし。地名をも東寧と改りる
るハ。あほれ人の知所多り。人物風土ハ紅毛
雜話中。海路乃紀の條ハ記しられバ。
きぬ。此地ハ人死もられバ裸體ハして森の
上ハ卧走り。其傷ハ火を焚て焙り。乾を。其
臭穢鼻式搏く拉ぐしたり。褒ハ居夷
どもハ。死屍を燥て乃。酒式喫し。肉を食
ひ。昼夜踊闘ぐとる。此國ハ「ハレンテイル」ハ

居喪者歌舞之圖

大寛人殯殮之圖



栽ゝる紙。小山氏の摸写せるなり。図ふいよ。
國性爺が子。鄭錦舎。嶌の主ゝる叶。奥州
中村。志称和の郡。太那志保とゝる地の廻
紅。大寛へ漂流せしを。寛文十三年八月。
日本へ送り帰しゝるものあり。ぞ節紅主
呉明ゝる者の上書。家兄岡野氏より切
ゝ珍花を。漂民の款状。および上書の文ハ。
海外異聞ふ載ゝり。

○濱田兄弟智勇の話

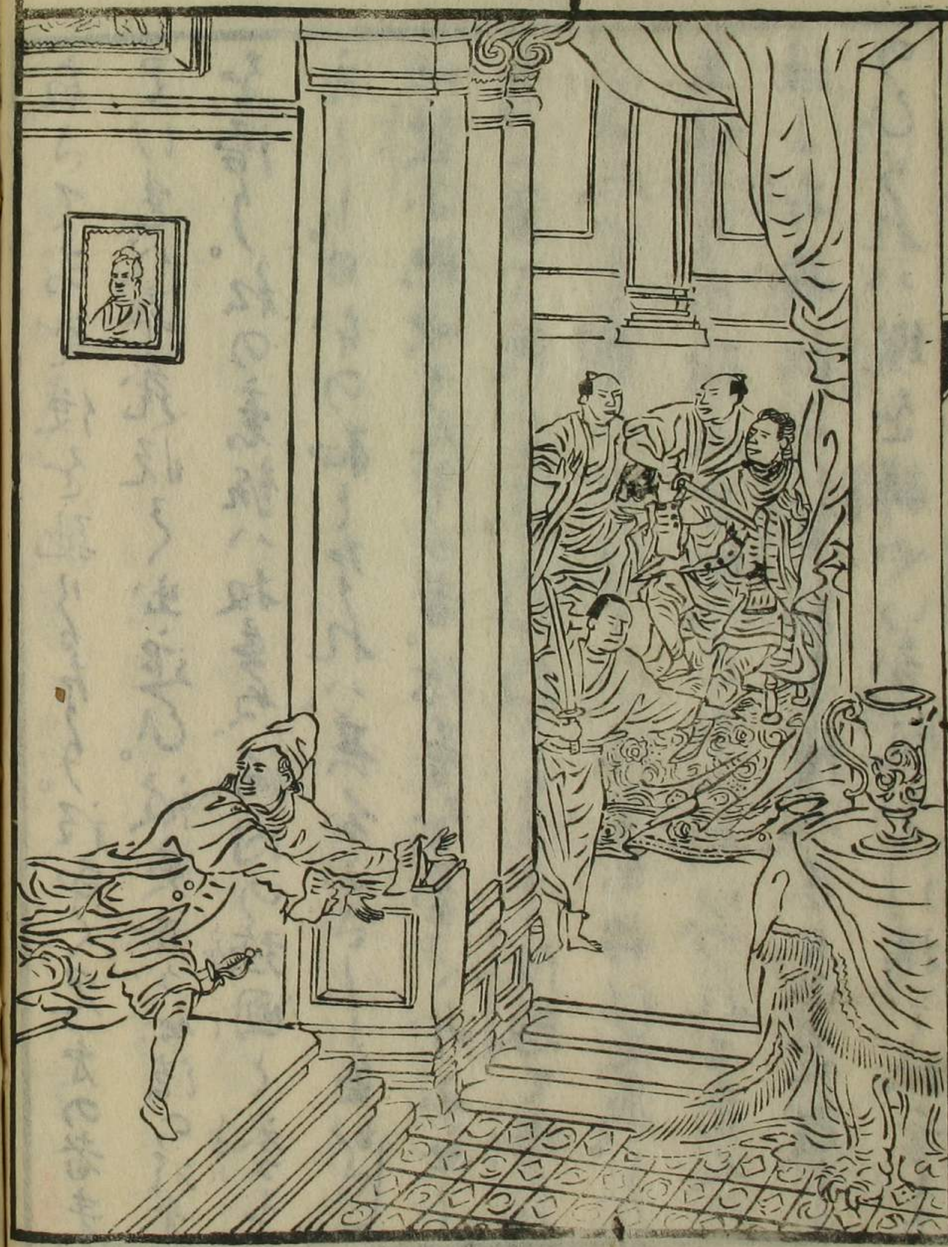
濱田兄弟が。大寛の酋長を窘ゝ事ハ。西川氏

既ゝ記しゝ事ゝ。珍品を切ゝる因ふ。甚荒唐紙
説。寛永年中浦陽の郡官末次平蔵なる人。慫
慂亜の地方へ回易の為ふ。出洋せゝ。ゝる運紅を。
日本ゝり異國へ出しゝゝる高紅ゝ九艘あり。末次氏二艘舟ゝ氏
一艘荒木一艘糸屋一艘泉州堺ゝ。伊藤屋紅一艘京都ゝ。糸屋一艘角倉
一艘伏見ゝ。一艘ゝり寛永十二年外國渡海停止せられぬ。大寛所産の蛮
紅の形華紅ふ似ゝり通高考ゝ。ゝを畫を出せり
海洋中ふゝ朝弄のあゝり。貨物をゝ。ふせんとゝる
ふゝる。紅人ども恨憤ゝるとハいへども。彼ハ大紅ふゝ。
ゝ。史畧兵鑒を行ゝ。ゝり。ゝ方ハ咬文易の為ゝ。
ゝ出しゝゝる高紅ゝれハ。もゝゝしき無益もなく。
不論ゝ紙動ゝ事の破弊引出ゝと千算万計

て漸よ虎口を遁れ。磨鉉ふこうちゝして
迅々ふ長崎へ迅帰り。爾々の中紙況道り来ば。
平花怠怠として怒猶を冲。ありゝき夷どもが
振巴うを。罷々以来日本の航よ指もさゝざるゝど。
目ふ拍見せてゝまんぞと。即刻管内の町人濱田
弥兵衛なる者をゞ招きける。扨此濱田弥兵衛ハ。茅
を新花といひく。夷人ともに仕貨剛強ふして頗
智器あり。使をりつく世ふ呼。平生人よ負さら紙
以く恢快ゝて。未以氏時常に伯叔を尊して
厚く恩を加へれハ。彼等も部人のめく伏従りる

ゝ。さてゝ此使を使を弛りるゝり。行ゝく兄弟の者来
りけるバ。平花悦く出迎ひ。彼夷ども公法の法式
を語り。私の意旨ハ扨置て。海内の強国と咎を
元し。日本の和とかれハ其分ふさしを申し。
此報ふ泡吹せんぞる者。你等を寄ふ分ふ。
色も角も能ふ〻〻ひ以させゝと。任憑て央りれ
バ。夷人いと易くうけがひ。弥兵衛弁弥左衛。
末以ゝりの附人を加へく十八人。いづれも高人の
油よ歩扮。私ふハ貨物を積入。不日ふ支度く
のひりれハ纜を解やいる。帆を引揚て地方を

寛之酉長圖



濵田兄弟宮大

ゝるれ。海路甚だ難しゝ。奔鯨白馬の法波をるゝとゝせず。追風ゝ去楫去ぐぬきて。日あゝぐ大寛へ着岸しけり。彼地みゝくも色を変らさず。番卒出く紅中を點見るゝか。原来ほれざるの旅高よ打移れば。蛮人ども さゝゝバ苦しゝかるまじゝて。「ゼ子ラル」へ酋長の蛮語是紅毛ゝゝ置所なゝ日本の高舶まゝりゝる中を陪しれば。利慾ふ走るゝ性るゝ者バ。高客ゝゝゝゝ。速ふ出さゝも。あゝゝふ對面しゝく齎来る物件を同。演田足弟ゝゝもさゝゝ紙て。些の貨物を元出しゝ。是所後ぜゝ彼陪後さゝ

ら〳〵ゝゝ云ゝゝゝゝゝゝゝ曲縁の前へ膝を前めゝゝ紙袋を足切く電の閃めく。能をつく「ゼ子ラル」を元て押付。紙巻を抜もゝく。拇先へ指附る。光と似ふ彩花泳た熱門。抜連ゝ突ゝゝゝ。是紙足ゝ侍側の蛮人。形を抱へゝ逃るもあり。紙を抜く者もあり。其中間の漏がめく。上を下へと かゝしけ。ふふ和へし味方の者。ゞ拍子を吟ゝゝゝく。日本刀を抜うざゝ。奥て内へ乱入長開噪大なゝゝゝ。其時ふ系大音を上。やおれ夷ども。爾等みゝゝふ乱紙動うさバ忽「ゼ子ラル」

を一突ふまべし。静まつて些細を咎めるなり。
あるとも獅子の吼かがめしー蛮人ども此一云よ僻易
ー。左右なくも寄付ぞ。右手ハ剣の柄をとる志
ぞ。たゞふハ一把の汗を握り。斤嚙を飾ぐ伺ひ
ける。泳ぎ出兄弟「ゼ子ラ匹」を引起ー。彼一條を
盤問れバ。「ゼ子ラ匹」慄々言いつゆ。いうふも哀
な法をそゝきしハ。我配下の蛮人なり。方今互
市の為ふ他國へ私を送る此地よ立ざれハ。ゆり
来る見式待く。重ね刑よ行ひ。罪を贖ひなる
べし。迄までの賞ふ。我一ふを去るべしと。

ふ為りける男子を出。自今以後夷亜の私ふ指
さしもいさまじし。海よ山ふ指を立るぞ。
只生今ハ「ゼ子ラ匹」を去し人質を引立て
京私ー。千里の波路を一走ふ。也清へ帰帆ー
く。未汉氏へ面謁ー。人貨の子我波ーしる。其年
の内大寛の「ゼ子ラ匹」彼海城ちんとも一ッ私の
蛮人ども式。奥く刑よ行ひ。未汉氏まて涼く
罷を謝ーしる。ゆ。「ゼ子ラ匹」ふ送姫
もふきるゆ。さ自でハ逆。翌年人貨を
返ーしる。波濱田が智雪の行。始皇を刺損

なくて荆軻がごとく八日をおくしうして海をこえうるぞ。ふるきハ世代早くして茅新荒ハ肥のみちの後の田。行来度の后とかりるとゐん此畫ハ「ハレニテイヒ」ふ栽するを北山氏の摸写したり。文字ハ同志ごとくなる異國の果まで亡。畫ふ写して茅ふ記しく芸紙のこと。濱田兄弟ハかへくもロ大魂のまゑ乃。天之元地ふ徹りうる者なり。

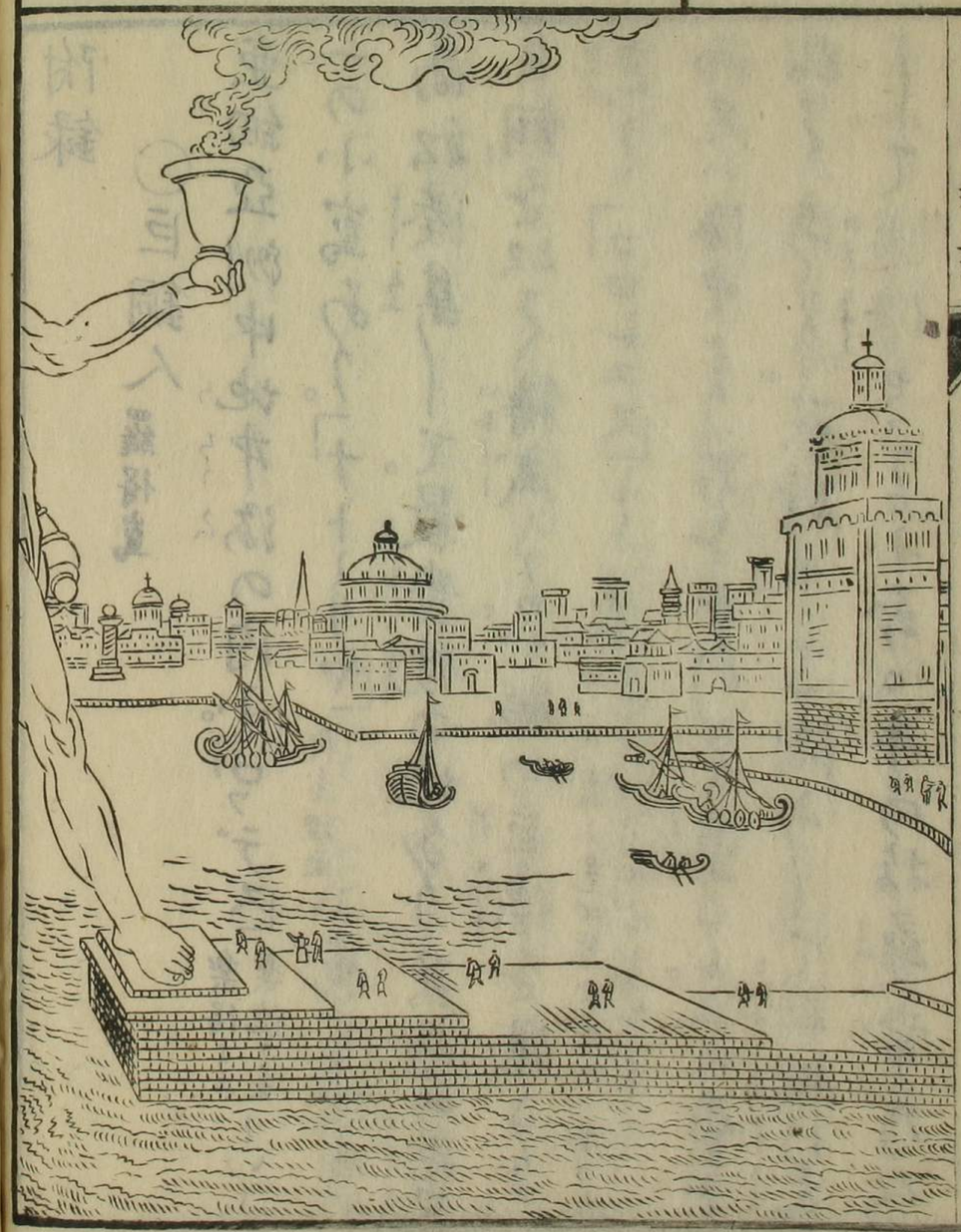
附録

○巨銅人　羅得嶌

亜細亞洲中地中海の内ふ。「ロッデス」楽得嶌楽德とも云ふ一の小嶌あり。「ナトーリヤ」那多理亜ふ属す。諸國の高私湊集して最豊饒の地なり。其時の港口ふ銅を以て鑄成る一軀の巨像を建てり。名づく「コロシユス」とも云ふ。中良案ふ是世界七奇の一なり又「ロッデスベール」ともふ

両足ハ海中より石をもりて築る。二の臺を踏て立つ。其跨ひて巨艘往来して通停せざるふなり。手の指尋常乃人

地中海中樂德嶌



港口鉅銅人之圖

あををもつて合抱するあるべし。全体のあらいさ。
あれ共以て[illegible]知るべし。さて方今の時ハ精
巧無比。まことふ海内の奇観なり。往昔國君。
鑄工「レイシッピジッシピユール」なる者。および其才子
「カーレスレイシデユス」なる者共人ふ命じて
造成せしむ。其像共建る時。大石数多體内ふ
納め鎮め。永久ふ安置せん事を計りる。
丈より星霜六十五年共経る後。地震の為
ふ摧倒せられ。基址ともふ海ふ沉没を碎て
涯よりあるのみ阜陵のみ。國王縣令「サラセ
ー子」なる者ふ命じ。駱駝九百隻を以。彼破壊
せる巨像を寄観ふ運送せしめ各所ふ点を
修飾せしめ[illegible]明の未西洋より帰化の
人文那ふなる時。彼海口共過て親く銅人を
見ることなり。左手ふ燭を持く。我ハ[illegible]
海神共照し。勝紙として港涯を語ふ便
なるしむ。其史を點ずんとする時ハ。足の内ふ
旋生る虫あり。屬共注く彼者ハ。體内をめ
ぐりて掌上ふ出。燈よりを施すなり。銅
人の拳より。日く。ふ丈千餘人おなを十

二年ふして彫成せり。此圖些説とも不
小山汎泥亀子ふるきを原写
せる物なり。

萬國新話巻之四終

水戸赤水長先生閲
浪華宗吉橋本先生製譯

和蘭新譯地球全圖 全一冊

和蘭冊の圖本數十を校閲し圖説を附す方域の精微諸番乃區別或ハ物産奇種の産地聊板相對の考證其他異聞珍説を挙且五帶三線二極黄赤道を明し只地理の委きのみならず天文初学の一助ゑ侍ん

華蠻通志 折本一冊 嗣出

寛政十二年庚申秋七月求板

大坂書肆 高麗橋一丁目 藤屋 淺野彌兵衛

博物筌（ハクブツセン） 改正 全一冊

此書ハ天地日月雪霜ノ理ヲトキ國郡山川來暦ヲ記シ年々長暦并註ス日和降晴御武鑑年中行事神社佛閣神秘縁起諸職諸藝流義始末佛家十宗ノ起リ并流派公家武家學者歌道僧尼隱士雅樂茶道能筆重ユ都テ和漢ノ名誉ノ人物草木器物等ノ出所并ニ異名和漢ノ年号年數等ヲ悉ク記ス誠ニ奇々妙々ノ書也

錦嚢智術全書（キンノウチギヨウセンシヨ） 全七冊

知恵ヲ以テ重キヲ軽ノ出來ナラヌヿノ心易ク調フ奇妙ノ秘密秘傳ヲ書アラハス書也日々此書ヲ用ヒテ事ヲナサハ德益廣大ニシテ万宝ヲ得ルノ書也實ニ人家日用ニ効有事ヽトモ悉ク集

術博物筌（ノウシユツハクブツセン） 全七冊

此本ハ秘法秘術妙藥等其外人家日々入用ノ事ヲ集メイロハ分ニシテ見安クスル先①ノ部ヲ見レハイホヲ又ハ法又ハ印内スミノ仕ヤウ○衣服シミヲトシ法イケ花ノ仕様右ノ外鎮火用心車トテ火サイヲ消ル秘術又火サイノ節万変心得家内ノカタツケ様等委シク記ス

書林 大阪北久太郎町四丁目 河内屋新治郎發行